

BOOK REVIEW

現代ミャンマーの貧困研究

エイ チャン プイン 著 晃洋書房, 2014年 172頁



九州大学大学院経済学研究院助教 水野敦子

1. はじめに

2011年に民政移管を果たしたミャンマーの経済開発に対する関心は、日本においてもこれまでにないほど高まっている。しかしながら、軍政下で貧困問題に関する研究は限られてきたことから、その詳細な実態は未だ十分には解明されていない。本書が扱う「現代ミャンマーの貧困研究」は、時宜を得た重要な研究課題であると言えよう。

評者は、書評の執筆依頼を受けて本書を手にし、筆者の経歴を知ったが、本書は2004年に来日した1985年生まれのミャンマー人の著者が2011年に熊本学園大学に提出した博士学位論文を基にしている。筆者の博士論文の指導教官であるマングマングルウィン教授が、本書の刊行によせて記したように「ミャンマーではこれまでに貧困に関する個人研究が制限されてきた」(p. i)。評者は、本書を拝読しながら、若いミャンマー人留学生が日本語を習得し、2007年に大学院に進学して母国の貧困研究に取り組み、その成果を日本語で書籍にまとめ公表するに至るまでの熱意ある研究姿勢に好感を持った。

以下では、本書の内容を紹介した後、若干のコメントを述べることとしたい。

2. 本書の構成と内容

本書の構成は、以下のようになっている。

序章 貧困の研究史

第1章 ミャンマーにおける貧困発生の構造分析

第2章 ミャンマーにおける貧困の現状分析

第3章 政策失敗と貧困緩和の要因

本書の内容を章別に順次紹介したい。

序章は、第1節で、まず、貧困の定義が行われる。本書で用いられる貧困とは、「物質的な必需品の欠乏だけでなく、基本的な保健や教育機会が欠乏している状態」(p. 4)である。そのうえで、人間開発を進めることが、現代の開発研究や貧困研究の中で重要課題とされるに至った貧困に関する研究史が紹介される。第2節では、ミャンマーにおける貧困の背景が整理される。筆者は、「ミャンマーの貧困とは、植民地時代の社会・経済構造によって引き起こされた問題であり、独立以降の政治・経済・社会問題によって拡大した慢性的なもの」(p. 13)であるとする。続けて、主に現代ミャンマーの経済開発や貧困に関する研究が紹介され

る。第3節では、本書の分析視角が示される。ここで、植民地時代以降の歴史的分析に経済 学的アプローチと政治的なアプローチを取り入れることが述べられる。

第1章では、第1節において植民地時代からの農村の貧困発生の経済的要因と社会的要因が整理される。第2節では、大都市の貧困発生原因の解明が試みられている。第3節では、これまでに検討された貧困要因が箇条書きでまとめられ、貧困発生のメカニズムがフローチャートによって整理される。

第2章では、まず第1節で現代ミャンマーにおける貧困の現状について、政府統計から近年、貧困率が農村部で増加していること、UNDPによる人間開発状況からは、ミャンマーがインドシナにおいて依然として最下位水準にあることなどが指摘される。次いで第2節では、筆者がヤンゴン市内の2つの「スラム街」で2010年に実施した調査に基づいて、社会経済状況が報告される。第3節では、ミャンマーとASEAN諸国を比較して保健、教育、経済、生活インフラなど貧困関連指標が検討され、ミャンマーの人間開発および貧困削減の改善が遅れていることが指摘される。

第3章では、第1節で戦後の国際開発援助において貧困削減策が重視されるに至った歴史的経緯が簡単に説明される。第2節では、ミャンマーの貧困削減に向けた政策や取り組みが、①独立後の経済・社会政策、②社会主義体制下の経済政策、③市場指向型経済体制下の経済・社会政策に分けて検討される。様々な経済指標を概略的に用いながら、政策の成果と問題点が指摘されている。第3節で、貧困緩和策における、経済政策のみならず、社会政策を含めた政策パッケージの重要性を提示して本書を締め括っている。

3. 若干の論評

ミャンマーの経済実態については、一次資料が少ないことに加え、軍政時代の極端な情報統制のために本格的な学術研究は限られている。そうした中で、ミャンマー経済開発に関する文献を渉猟し、限られた統計資料を整理しつつ、現地調査も実施して貧困問題の実態に迫ろうとする本書は、テーマ設定として貴重なものであり、研究意義が認められる。特に、ヤンゴン市内2地区で実施した現地調査によって得られた計600世帯のデータは、未解明の都市貧困問題に迫る貴重な資料としての価値を見出せよう。

本書を読めば、ミャンマー出身の若い研究者が、留学先の日本において大学院に進学し研究成果を取りまとめるまでの瑞々しい努力と熱意を感じることができる。しかし、恐らく日本語での論文作成に大変苦労したであろうことが窺える箇所も散見され、その為であろうか、残念ながら個々の表現、論旨、構成といった全般にわたり、荒削りである印象を拭えないままに読了した。内容の平易さにもかかわらず、本書は必ずしも読みやすくはない。また、本書の研究意義に鑑みて、以下のような今後の課題も残されていると考える。

1つは、貧困およびその緩和策に対する歴史的考察で、植民地時代に生じた構造的問題が、独立や経済体制の移行を経てもなお貧困の要因として残存していることを主張している点に関してである。貧困発生の構造分析では、既存研究での整理、およびそれらによって指摘されてきたことの接合に大部分が割かれており、評者は本書の歴史的分析に独自性を見出すこ

とが難しかった。さらに、このような帰結に至った要因の実証的な分析が、その論拠として必ずしも十分に示されていないために、植民地時代以来の貧困緩和策に対する評価も表層的な分析に留まってしまっていることが惜しまれる。

2つは、ヤンゴン市内2地区で実施した現地調査によって得られた計600世帯のデータに基づく貧困の現状分析に関してである。ミャンマーでは貧困に関する資料が極めて限られているなかで、現地調査により収集した一次資料自体が学術的価値を有すると評価できる。しかし、その貴重な情報に対して、諸々の社会経済指標を整理するに留まり、実証的な分析が十分に成されているとは言い難い。世帯属性や世帯構成員の個人属性と貧困との相互関係が十分に吟味されていれば、ヤンゴン都市部の貧困の実態とその要因の解明により有益な示唆が得られたように思われる。

これらの問題を掘り下げることで、第3章第3節において、貧困削減緩和策として、国際援助において一般に強調される社会政策を含んだ包括的な政策パッケージを挙げるに留まらず、ミャンマーに求められる貧困緩和策を具体的に提示することが可能となったのではないだろうか。

本書は、収集された資料、情報の貴重さに鑑みて、ミャンマー経済開発において重要な課題である貧困問題に対する果敢な取り組みとして位置づけられる。しかし、この試みが十分に達成されるには、今後の研究が待たれるところである。筆者による研究の更なる深化によって、筆者自身が「あとがき」で述べるように、本書が今後のミャンマーの貧困や社会経済状況に関する研究のより一層の発展に繋がることを期待したい。